

一八八五年十月二十五日(日)

聖ラーマクリシユナとヴィジヤイ、ナレンドラ、校長、サルカル先生たちとの楽しい会話

タクルの病状報告のため、校長は医師のところへ

今日は日曜日、カルティク月十日、黒分二日目。一八八五年十月二十五日。聖ラーマクリシユナはカルカッタのシャームプクルにある家にずっと住んでいらつしやる。喉のガンを治療するためである。このごろはサルカル先生に診<sup>み</sup>てもらつておられる。

医師のところは大覚者<sup>バラマハンサ、デーヴ</sup>様の病状を報告に行くのが、この頃の校長の日課になっている。今朝も六時頃来てごあいさつしてから、校長はタクルにおたずねした。

「お体の具合はいかがでございますか？」

聖ラーマクリシユナはお返事下さつた。

「医者に言つておくれ。明け方近くに、口のなかに水がいつぱいあふれてきて咳が出たと——。それから、沐浴してもいいかどうか聞いてくれ」

七時少し過ぎに校長は医師に会って、このことを報告した。医師の昔の先生と友人たちが二、三人、部屋に同席していた。医師は年老いた先生にこう言った——「先生！ 夜中の三時ころから大覚者のことが気になって、眠れなかったのですよ。まだ大覚者が私の心のなかにいるのです」（一同笑う）

友人の一人が医師に言った——「先生、あの**大覚者**のことを**神の化身**だと言ってる人が何人もおられますが……。あなたは毎日お会いになっていらつしやるのですから、いかがですか、あなたはどのように思ひになりますか？」

医師「アズ マン アイ ハブ ザ グレイティスト リガード フォー ヒム（私は一個の人間として、最高の敬意を払っています）」

校長「（医師の友人に）——サルカル先生はあの方を、それは、それは、ご親切に診て下さるのですよ」

医師「親切とおっしゃるのか！」

校長「いえ、その、私たちに対してであって——**大覚者**様に対してではありません」

医師「そんなことぐらいで片付けられては不満ですなあ。だいたい、あなた方はご存知ないだろうが、損をしているんですよ。毎日、毎日、三人位の患者を診ないであそこにかけてくれるんですよ。次の日に、こちらからその患者の家に行くのですが、招かれないのに行くのだから、診察料をとるわけにはいきません——自分で勝手に行っておいて、お金を請求するなんてできますか？」

マヒマー・チャクラバルティ氏のことが話題になった。昨日の土曜日、医師がタクールの診療に行っ

たとき、チャクラバルティ氏が来ていたのである。医師の方を見ながら氏は、タクールにこんなことを申し上げた——「先生、あなたは医者の高慢をつけあがらせるためにご病気になるたようなものです」

校長〔医師に〕マヒマー・チャクラバルティは以前、こちらでああなたの医学に関する講義があつたとき、聴講に来ていたのですよ」

医師「そうでしたか？　しかし彼は、まことにタマスのだなあ！　おわかりでしたか、私は彼に『ゴッズ ローワー サード——神の低いほうの三番目(タマス性)』としてあいさつしたのを？　神のなかには全部(サットヴァ、ラジャス、タマス)あるわけですよ。彼の言つたあの言葉、マークなさいましたか？　『あなた様は、医者*の*我執高慢をつけあがらせるために病氣におなりになったのだ』……」

校長「マヒマー・チャクラバルティは信じ込んでいますのですよ。その氣になれば、大覚者様はご自分で病氣を治すことが出来になると——」

医師「オー！　そんなことができるのでしょうか？　自分で病氣を治すなどと！　我々医者が、あれはガンだと断定しているんですよ！　我々だつてどうしても治すことができないのですよ！　あの方は、この病氣のことを何一つご存知ない、それなのにどうして治せるのですか！

(友人に向かつて)——おわかりでしょう、あの病氣は決して治らない。しかし、この人たちは皆しで(信者のように)心をこめて看病しているのです！」

聖ラーマクリシユナ、お世話の者と共に

校長は、タクルールのところへ来てくれるように医師に頼んで帰宅した。食事その他をすませてから、午後三時ごろタクルールのところに来て、午前中の医師との会話を話しておきかせした。

校長「今日の医師には、私は全く参ってしまいました」

聖ラーマクリシユナ「何があつたんだい？」

校長「『あなた様は、医者どもの高慢をつけあがらせるためにわざとご病気になるたのです』という昨日のあの言葉を、ちゃんと聞きとめておられましたね……」

聖ラーマクリシユナ「誰が言つたつけ？」

校長「マヒマー・チャクラバルテイです」

聖ラーマクリシユナ「それで？」

校長「それで、マヒマー・チャクラバルテイのことを、神の低いほうの三番目（タマス性）だと仰うのです。とにかく現在では先生は、神にはすべてのグナ（サットヴァ、ラジャス、タマス）が含まれている」ということは認めたのですが――。（タクルール笑う）

それから私に、こう言われました。夜中の三時ごろ目がさめて、大覚者パラマンサのことばかり思っていたと。私が行つて話をして八時ごろも、『まだここに大覚者パラマンサがいる』と申されました」

聖ラーマクリシユナ「アッハッハッハ、そうかい。あれはイギリス式の教育を受けた人だから、わ

たしのことを瞑想しろだなんて、とてもこちらから言えたもんじゃない。それなのに自分からそれを実行したとはねえ、アハハハ……」

校長「それから、アズ、マン、アイ、ハブ、ザ、グレイティスト、リガード、フォー、ヒム、と言いました。『私はあの方を神の化身だとは思わないが、一個の人間として最高の敬意を払っている』という意味でございます」

聖ラーマクリシュナ「それから、何か別の話をしたかい？」

校長「私が、『今日は、ご病人のところへのご都合は、いかがなものでしょうか?』と聞きますと、『行くに決まってるでしょう。私が自分で行ってちゃんといたしますから!』(タクール笑う)それから、こうもおっしゃいましたよ。『私が毎日、どれだけ損をしているか、あなた方にはわからないだろうな——毎日、二、三人の往診に行けてないんですよ』と」

### ヴィジャイたちと愛の至福のひととき

ブレマーナンダ

間もなく、ヴィジャイ・クリシュナ・ゴースワミーが大覚者様に会いに来た。いつしよに数人のブラフマ協会員が来た。ヴィジャイはかなり長い間、ダツカに行っていた。現在、西の方の聖地をめぐり歩いて、最近カルカッタに着いたばかりである。部屋に入ると、彼は床に額ずいてタクールを拝した。大ぜいの信者たちが来ている——ナレンドラ、マヒマー(マヒマーチャラン)・チャクラバルテイ、ナヴァゴパール、ブパテイ、ラトウ、校長、若いナレン、等々。

マヒマー・チャクラバルティ「(ヴィジヤイに向かつて)——先生、聖地巡礼なすったり、いろいろな地方を旅行してこられたそうですね、ぜひその話を聞かせて下さい」

ヴィジヤイ「何を話せばいいやら！ 今、現在、私が坐つているところにすべてがある、ということがはつきりわかるのです。あちこちうるつきまわるのはムダなこと！ ある場所は、こちら(タクール)を十六アナ(100%)として、一アナか二アナ(5〜10%)の値打ち——。ところによっては、せいぜい四アナ(25%)くらいでしょう。こここそ、まるまる十六アナの場所なんですよ！」

マヒマー「まったくその通りです。そしてあちこち歩かせるのもこの方、一つ所に落ち着かせるのもこの方なのですよ」

聖ラーマクリシュナ「(ナレンドラに) 見ろ、ヴィジヤイの境地を——。徴しるしがまったく変わった。だろ。もつと深くなつているんだ。わたしは首筋と額を見て覚者かどうかを見分ける。そこを見れば、パラマハンサかそうでないかがよく分かる。

マヒマー・チャクラバルティ「(タクールに) 先生！ お食事の量が減ったんですか？」

ヴィジヤイ「うん、どうもそうらしい。(聖ラーマクリシュナに)——あなた様の病氣のことを聞きまして参上いたしました。それに、ダツカから……」

聖ラーマクリシュナ「何だつて？」

ヴィジヤイは何とも返事をしない。しばらくの間黙っていた。やがて……。

ヴィジヤイ「この御方がわからせて下さらないかぎり、自分でこの御方を理解することは難しい。

「ここそ十六アナ(100%)だ」

聖ラーマクリシユナ「いつか、ケタル(原典注)が言っていたつけ——『他の場所ところには食べる物が全くない。でも、ここへ来ると満腹になれる!』と」

マヒマー・チャクラバルティ「満腹ですつて? 溢あふれ出ますよ」

ヴィジヤイ「合掌して聖ラーマクリシユナに向かい——あなた様がどなたであるか、私にはハッキリわかりました! おつしやつて下さる必要はございません!」

聖ラーマクリシユナ「(恍然うつつりとして) もしそう思うなら、そう思っていていいよ」

ヴィジヤイ「わかりました」

こういつて彼は、タクルの足もとに身を投げ出し、自分の胸にタクルのお足を掻かき抱いだいた。この間タクルは、完全に神意識に没入して、彫像のように身動きもせず坐まつておられた。

この神聖な愛の光景を見ていた信者たちは、ある者は感涙かみろいの声をあげ、ある者は神への讃詞を思わず知らず口にはほせている。各人、それぞれの視点(霊的段階)でタクルのお姿を注視している。ある人はタクルを最上最尊の信仰者として、またある人はすぐれたサードウとして、またある人は人間の姿をとられた神アツァタールの化身として——それぞれの視点で見ている。

マヒマーチャランは涙にぬれた目をして歌った——

見よ、見よ、聖なる愛の権化

——そして時々、ブラフマンを見ているかのような様子で口ずさんだ——「トゥリヤン サッチダー  
ナンダン ドヴァイタアドヴァイタヴィヴァルジタム（『一も多も超えて至高なるサッチダーナンダ  
に溶け入る』）」

ナヴァゴパールは泣いていた。

こんどは、もう一人の信者プバティが歌った——

聖なるかな 無相にして無限なる一者

極みなく高く 極みなく深しブラフマン

君は真理の光、愛の鉱山<sup>やま</sup>、常楽<sup>ところ</sup>の住地

様々の宇宙のおもしろき色相<sup>いろかたち</sup>は

測りがたき君の心の美と豊饒<sup>ゆたかさ</sup>の表現

大いなる詩人、本源なる詩人よ！

君の想いに合わせて

（原典註1）ケダル||ケダルナート・チャトジェー氏は長期間、役職のためダッカに住んでいた。神の話になるとすぐ涙ぐむほどのすぐれた信仰者だった。家はハリサハールにあった。



日と月は昇り、また沈むなり

足は黄金こがねの小さき文字、また雲は味わい深く

虚空の終わりなき頁ページに妙なる詩をつづる

六つの季節はめぐりて天地と声を併せ

壮麗なる讃歌を絶えまなく唱うたい奏かなでる

花々は君の可愛さ、静かなる水は平安やすけさ

雷鳴とどろきわたり君の厳しさを語る

底もなき君の心を ああ我ら知り得ず

生しょうじょう々せぜ世々せぜひたすらに君を渴あ仰おぎ瞑想しんそうす

いく百万の太陽と月と星々は

歓喜にふるえつつ君の御足を礼拝し

人類はその御業みわざを眼のあたりにして

あふれる喜びの涙はあまたの大河となる

神々と天使と人は一つとなりて

永遠なる大楽の住地きとを礼拝したてまつる

希ねがわくは恵み給え、智慧と愛と信まことと幸福さいわいを

希ねがわくは護り給え、御足もとなる完まこときかくれ家に

六つの季節——春、夏、雨季、秋、霜期、冬

ブパティはまた歌った――

至高意識チダイイナンダの海に、愛の喜びの波立ちて

大いなる歓喜、甘露したたる遊戯リイラの

うつくしさ たとえんかたなし

さまざまの楽しき想いは次つぎに

新しく、また新しく波とおこりてまたくだけ散りゆく

ああハリよ、ハリ、ハリ、ハリ、ハリ！

いと深きヨーガにすべてはひとひとつとなり

時間と空間の区別へだたりあとかたもなし

今ここに喜び勇みて両手をかかげ

わが心よ、いざハリの名をうたえ！

◇ ◇

悩みも、恐れも、正義も、義務も

血統ちすじも、身分も、夢と消えうせ

おおハリよ、私は何処どこにいるのか？

身も心もそっくり盗んで

友よ、私を見捨てるつもりか？

ああ何故どうして此処へ来たのか

果てしない愛の海の岸辺に——

私のあわれな胸は、天の情熱あついに縁ぐちまで満され

さて、これからどうなることやら——

プレーマードースは笑う——

聞け、世の人びとよ

これこそ神への新しき道

心配するな、恐れるな

長いこと経った後で、タクールはこの世の意識をとり戻された。

〔ブラフマンの智識と不思議な計算——神アヴァタールの化身の必要性〕

聖ラーマクリシュナ「(校長に向かつて)——いま、何だか妙な具合になってしまつて——。恥ずかしいよ。何だかモノに憑つかれたようになって、自分が自分でなくなつたようなんだ。

そのあとで、数の勘定もはつきりできなくなつて、ためしに数えてみると、1、7、8、なんて……」

ナレンドラ「すべては、一つですからね！」

聖ラーマクリシュナ「いや、一つも二つもないんだ！」(原典註2)

マヒマー「おっしゃる通り！ ドヴァイタアドヴァイタヴァイヴァアルジタム（一も多も超える）」

聖ラーマクリシュナ「計算なんて腐ってしまふ！ 学問を通じてあの御方に触れることなど、出来やしないよ。あの御方は経典や聖典——ヴェーダ、プラーナ、タントラ、そういうものを超えている。手に一冊でも書物を持っていたら、その人はたとえ智者でもラージャリシ（外見は王様のように壮麗な見神者）と呼ばれる。ブラフマリシ（常にブラフマンに住している見神者）は外見には何の徴しるもない。聖典の役目はどういうものか分かるかい？ ある人が五シャル（45kg）のサンデシユ（ミルク菓子）と下衣カボル一枚送ってくれるようにと、手紙を書いた。受けとった人はそれを読んで、五シャルのサンデシユと下衣カボル一枚ということをしつかり心に留めておいて、手紙は捨ててしまった！ もう手紙に用はないだろう？ ヴイジャイ「サンデシユは、たしかに送ってきました！」

聖ラーマクリシュナ「神は人間の体をまとつてこの世に化身して来なさる。あの御方はあらゆるところに、あらゆる生物のなかにいらっしゃるのは事実だ。しかし、化身してこなければ、人間の期待に沿うことが出来ないんだよ——必要を満たすことが出来ないんだよ。わかるかな？ 牛のどこを

(原典註2) 一つも二つもないんだ——The Absolute as distinguished from the Relative. (絶対なるものは相対からは区別される)

触つても、確かに牛に触ったことになるんだ。角つのに触っただけでも牛に触ったにはちがいない。だが、一番大事な牛乳は乳房から出てくる」(一同笑う)

マヒマー「牛乳が飲みたい場合、牛の角に口を当ててみてもどうにもなりません。乳房を吸わなければだめです」(一同笑う)

ヴィジヤイ「しかし、生まれたての仔牛は、はじめのうち母牛の体をあちこちねぶって乳房を探します」

聖ラーマクリシュナ「アッハッハッハア。仔牛がそうやっているのを見て、誰かが乳房のところにも口をもつていつてやるさ」(一同笑う)

### 信者たちと愛プレイマナーナダの至福

こんな話をしているところへ、サルカル先生がタクルの病気を治療するためやってきた。彼は部屋に入るなりこう言った——「昨夜は三時ころから目がさめて、あなたのことばかり心配していましたよ。カゼをひかないかと思って——。それからいろんなことを考えておりましたよ、あなたについて」

聖ラーマクリシュナ「咳が出て、喉が痛かった。明け方、口いっぱい水がたまつて、トゲでも刺さつたような感じだったよ」

医師「そのことはみな、朝方、報告を受けました」

マヒマーチャランが、インド中あちこち旅行したときの話をした。「セイロンでは笑っている人が

見当たらなかった」と言う。と医師が、「もしそれが事実なら、調べてみなければなりませんね」と答えたので、一同は大笑いした。

〔商売としての医者について〕

医療の仕事についての話になった。

聖ラーマクリシュナ「(医師に)——医者という職業は、大そう高級な尊敬すべき仕事だとたいいていの人は思っている。気の毒な病人がいたら、金を受けとらずに治療してやるようなら、そりゃ偉い人だ。仕事も立派だ。だがね、どんな場合でも必ず金を受けとってこういう仕事をつづけていると、人はだんだん冷酷になっていくものだよ。商売だとばかり割り切つて、金儲けのために人のウンコの色をながめたり検査していじくつたりするのは、どう考えても卑しい下等な仕事だね」

医師「その通り、そんなことばかりするのなら、そりゃ下等な仕事だと言えるでしょう。まあ、あなたのところへ来て、偉そうなことを言ってみても始まりませんが——」

聖ラーマクリシュナ「うん、でも、利己的な気持ちなしに、人に奉仕する気構えで医者の仕事をするなら、そりゃもう大したものさ、とてもいい仕事だ。」

とにかく、どんな仕事をしていようと、世間で暮らす人達にとっては、サードゥと親しく交わることがとても大事なんだ。神に信仰をもっていれば、自然とサードゥがいる場所ところを探して行くようになる。たとえばさ、大麻吸いは大麻吸いとばかり付き合いたがる。大麻を吸わない人に会うとうつむい

てコソコソ行ってしまったり、隠れたりする！　ところが大麻吸いに会うと、初対面でも百年の親友に会ったような喜びようだ——抱きついたりして！（一同笑う）それからハゲタカは、ハゲタカ同志寄り合つて住んでいる」

〔サードゥは生類全体に対して慈悲心を持つ〕

医師「それから、ハゲタカはカラスを恐れて逃げます。人間ばかりでなく、生き物全部に対して仕えるべきだと、私は主張しているのですよ。私はよく、スズメに粉を撒いて食べさせてやるんです。粉をこねて小さな粒にしましてね、地面に撒まいておくと、屋根に群がっているスズメがやってきてつ**いばむ**のですよ」

聖ラーマクリシュナ「ワァ！　そりゃたいしたものだ。生き物に食べものをやるのはサードゥの仕事だ。サードゥたちはよく、アリンコに砂糖をまいてやつたりするよ」

医師「今日は歌はないのですか？」

聖ラーマクリシュナ「(ナレンドラに)——一つ歌っておくれよ」

ナレンドラはタンブーラ(弦楽器)にあわせて歌った。ほかの楽器も誰かが弾いて伴奏した。

ああ 美しきかな 君の名よ

弱く貧しき者たちの避難所かくれが

甘露の雨のごと　わが耳にふりそそぐ  
永遠とわの生命いのちの君よ

わが宝はただ一つ　君の御名

とこしえの楽すなしき住ま処か

そを歌いたたえる者は　滅めびざる命いのちとならん

重なく深ふかきわが胸なやみの苦く悩ない

たちまちに消ほし滅めぼすは

蜜みつのごとく甘あまき君の御名

君の御名の甘あまき響なきで

わが胸は甘あまき安やすらぎに満みつ

ああ　わが心こころの主あるしよ、至いた福ふくの御名なよ！

ナレンドラは又、うたった。

おお、マーよ、私を狂くるわせておくれ  
(梵フラフママイ女メ神イ)



智慧や分別にもう用はない

(梵女神ブラフミン、マーよ、私を狂わせておくれ)

(マーよ) あなたの愛の酒で酔わせておくれ

マーよ、信者の心を盗むお方よ

あなたの愛の海に沈めておくれ

この世はあなたの気狂い病院

笑う人あり 泣く人もあり

喜びに我を忘れて踊る人もある

イエスもモーゼもチャイタニヤも

マーよ、愛の悦びに酔いしれた

この恵まれた仲間に入れておくれ

天国に仲間が集まり うれしい狂気の祭

互いに師になり弟子になる

誰にもこんな愛の遊戯あそびはわからない

マーよ、愛に狂ったお方よ

この貧しい私、愛の僕を

あなたの愛の宝で満たしておくれ

歌が終わったとき、そこには再び驚くべき光景が展開された。部屋中の人たちは、法悦に酔って狂ったようになっていた。学者は学者的威厳をかなぐり捨てて突っ立ち、「大実母よ、我を狂わせておくれ、智慧や分別に用はない」とうわ言のように言っている。ヴィジャイが真っ先に座から立ち上がって、法悦に恍惚としていた。その次が聖ラーマクリシュナ——。治る見込みのない病気のこともすっかり忘れ果てたご様子。タクルの正面に坐っていた医師も立ち上がった。医者も患者も我を忘れていた。若いナレンもほとんど三昧状態、ラトウもそれと同じ様子。科学を学んだはずの医師が、驚いた様子で靈妙不可思議な光景を見ているのだ。みんなが外界の意識をなくし、息もせず、身じろぎもせずに法悦境にひたっているのを——。やがて、その状態が少しゆるむと、ある者は泣き出し、ある者は笑いだした。関係のない人が見たら、酔っ払いの集まりのように見えたにちがいない。

### 信者たちと共に——聖ラーマクリシュナと怒りの克服

このことの後で、みな再び席についた。夜八時ころになっていた。会話がまたつづいた。

聖ラーマクリシュナ「(医師に)——今の法悦境を見て、あなたたちのサイエンスではどう説明するね？ 何もかもお芝居だと思ukai?」

医師「(聖ラーマクリシュナに向かつて) こんなに大ぜいの人が一度にああなったのですから、ナチュラルなものだと思えますね。わざとあんなフリをしていたとは思われません。(ナレンドラに)——君が、大実母よ、私を狂わせておくれ、智慧や分別にもう用はないと歌ったとき、私は自身をどうにもできなくなつてねえ、あやうく、飛び上がるころだった。やつとの思いでセーブしたんですよ。感情を表面に表しちやいかん、と自分に言いきかせて——」

聖ラーマクリシュナ「(医師に)——あなたは、ビクともゆるがぬスメール山のようだったよ、アツハツハツハ(一同笑う)。あなたは深い深い魂の人だ。ルーバやサナータナ(二人ともチャイタニヤの秀れた弟子)の心に起こったことは、誰も気が付かないからね。小さな水たまりに象が入ると四方八方に水が撥ね返る。だが、深く大きい湖に象が入っても、水が飛び散るようなことはない。ロクに気付く人もいないくらいだ。聖女(ラーター)が友だちにこう言った。『あなたたちは、クリシュナと別れずに分泣いたわね。それなのにまあ、見てちょうだい、私のハートの固いこと、目には涙一滴、出やしない』すると、ウリンダがこう答えた。『友よ、あなたの目に涙が浮かばないのには、深いワケがある——。あなたの胸は、別れの悲しさでいつも火が燃えているから、目に涙が出ようとすると、胸の火の熱ですぐ蒸発してしまふのよ!』と」

医師「誰だつて、口ではあなたにかないませんよ、ハツハツハツハ」

いろいろな話が出た。聖ラーマクリシュナは初めて霊的経験をしたころのことを話された。また如何にして、情欲や怒りなどを克服するかということを話された。

医師「あなたが法悦に恍惚<sup>こうご</sup>として地べたに倒れていたとき、悪いやつがブーツで蹴飛ばした、という話をいつか聞きました」

聖ラーマクリシユナ「きつと、校長から聞いたんだらう。やつはカーリーガートのチャンドラ・ハルダーだ。シエジヨさんとこへよく来ていた男だよ。わたしは、神さまの愛に我を忘れて暗い土間に倒れていたんだ。チャンドラ・ハルダーは、わたしがワザとそんなふりをして、シエジヨさんの欲心を買おうとしていると思ったんだね。やつは土間に下りてきて、長靴で何度もわたしを蹴りつけた。体にアザがついてしまったよ。みんなはシエジヨさんに言いつけに行くといっつてきかなかったが、わたしはそうさせなかった」

医師「それも又、神の遊びです。そういう事件を起こさせて、怒り<sup>〃</sup>をいかにして克服するかということ、そして、他人をゆるすこと<sup>〃</sup>を人びとは学ぶでしょう」

〔ヴィジヤイとナレンドラがタクルの霊姿を見たこと〕

この間にも、タクルの面前でヴィジヤイと他の信者たちが様々なことを話し合っていた。

ヴィジヤイ「誰か一人、いつも私といっしょにいて下さるんですよ。そして、遠くにいても、どこで何が起こっているのか、知らせて下さるのです」

ナレンドラ「ガーディアン・エンジェル(守護天使)のようですね」

ヴィジヤイ「ダツカで、この方(タクル)にお会いしましたよ！ ちゃんとお体にも触ってみまし

た！」

聖ラーマクリシユナ「アッハッハッハッハ。そりや、ほかの人だろうさ！」

ナレンドラ「僕もこの方を何度も見ましたよ！（ヴィジャイに）——だから、あなたの言葉を信じられないなどは、どうしても言えないんです！」